The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞イヴァン・イリイチ（著）『コンヴィヴィアリティのための道具』
Author(s)	矢守, 克也
Citation	災害と共生. 2019, 3(1), p. 79-84
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73158
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

イヴァン・イリイチ（著）『コンヴィヴィアリティのための道具』ちくま学芸文庫, 2015 年 10 月刊, 252 頁

矢守克也[1]
Katsuya YAMORI

１．「道具」「物象化」「自立共生」―3つのポイント

本書については、「コンヴィヴィアリティ」（自立共生）という耳新しく魅力的な用語に惹かれがちだが、実際には、「道具」という何の変哲もない用語の方に理解のためのポイントはある。筆者の考えでは、ここで言う「道具」は、特に、災害と共生という視点に立ったときには、マルクスを踏まえて真木（2014）が詳細に論じている〈媒介〉として位置づけるとわかりやすい。〈媒介〉について詳しく論じる余裕はないので、本誌に掲載済の拙稿（矢守, 2017）の参照をお願いし、ここではその骨子のみを次段落に再掲しておく。その上で、「道具」を含め3つのポイントについて順に検討することにしたい。

本来、人間は〈自然・内・存在〉であり、かつ、〈社会・内・存在〉である。この〈内・存在〉の状態にある人間は、自然および他者との融合的な統一体である〈本源的な共同体〉をなしている。しかし、〈本源的な共同体〉は、多くの場合、〈人間・対・自然〉、かつ、〈個人・対・社会〉、すなわち〈対・存在〉の状態へと転回（変質）する。この転回（変質）のキープレーヤーが、他ならぬ〈媒介〉である。〈対・存在〉では、人間は、科学、インフラといった〈媒介〉を通じて自然と関係し、また、市場、制度といった〈媒介〉を通じて社会と関係する。そうすることで、人間は、自然および他者がもつ本源的な両義性 ― それらが、人間にとって、幸福の源泉であると同時に、不幸の源泉でもあるという両義性 ― を隠蔽し、不幸の源泉としての性質を潜在化させ、幸福の源泉としての性質のみを〈媒介〉を通じて、自然および他者（社会）から取り出そうとする（矢守, 2017）。

(1) 「道具」

まず、第1のポイント、「道具」について基礎的な確認をしておく。イリイチの道具と〈媒介〉とが同じ方向を向いた概念であることは、本書から次の箇所を引くだけで十分わかる。

> 私はその言葉（自立共生［引用者挿入］）に、各人のあいだの自立的で創造的な交わりと、各人の環境との同様の交わりを意味させ、またこの言葉に、他人と人工的環境によって強いられた需要への各人の条件反射づけられた反応とは対照的な意味をもたせようと思う。（p.39-40）

ここから、イリイチが、本書の基幹概念である「自立共生的な道具」について、真木（2014）と同様、それを、人間と自然との〈媒介〉（各人と（人工的）環境との交わり）、および、人間と人間との〈媒介〉（各人のあいだの交わり）として位置づけていたことがわかる。

次に、イリイチは、こう加える。

> 道具という言葉を、ドリル…のような簡単なハードウェアだけを…自動車や…大きな機械だけを包含するのではない。…教育とか、健康とか、知識とか、意思決定とかを生み出す触知し得ない商品の生産システムとを、道具の内に含めるのである。（p.58）

このとき、道具は、まさに道具箱に入っているような狭義の道具だけを指すわけでは、むろんない。見て触ることができるモノに限っても、防潮堤やダムは、もっぱら人間と自然とを〈媒介〉する道具だし、スマートフォンや防災マニュアルは、もっぱら人間と人間とを〈媒介〉する道具である。さらに、上の例示の通り、道具には物資の形状をとらないもの、たとえば、規範やルール、慣習や文化も含まれる。たとえば、「引き波を見たら避難せよ」はもっぱら自然と人間を〈媒介〉する道具だし、「自助・共助・公助のバランス」は主に人間と人間を〈媒介〉する道具である。

(2) 「物象化」

次に、第2のポイント、「物象化」について述べる。物象化とは、要するに、本来は社会的な関係の産物でしかない存在が、あたかも物のような客体性を帯びて、人びとを拘束する現象のことである。イリイチが、

*1 京都大学防災研究所 教授・博士（人間科学）
Professor, Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University, Dr. Human Sciences.

> この書物で、私は目的と化するに至った手段を見わける方法を提供したい。（p.45）

> 私は以上五つの脅威を、手段を目的に等値する破壊的な作用を共通してもっている…（中略）…カテゴリーとして叙述するつもりである。（p.112）

などと注意喚起するとき生じている現象が、道具つまり〈媒介〉をめぐる物象化である。矢守（2017）で指摘したように、本来、〈媒介〉には、人間と自然、および、人間と人間とを調和的に接続する機能が求められている。たとえば、防潮堤のおかげで、人間の生活と自然（津波）の脅威との関係が間接化され、その限りで両者は調和的に接続される。あるいは、災害対応組織や防災マニュアルのおかげで、自治体職員と地域住民、あるいは、被災者と救援者とが調和的に接続される。

しかし、こうした〈媒介〉は、常に一人歩きする危険を伴っている。本来、手段であった〈媒介〉（道具）が、あたかも物のような客体性を帯びて、言いかえれば、そのようにしかありえないものとして自己目的化してしまう現象、つまり「物象化」である。「防潮堤の高さが十分でなく大被害を招いたのだから、かさ上げ工事しましょう～それしかないですね」、「現行の規定やマニュアルにない救援活動はできません～仕方ないですね」。こういったやりとりには、本来、自然と人間とを調和させる手段でしかなかった防潮堤や、本来、人間と人間とを調和させる手段でしかなかった規定やマニュアルが「物象化」していく様が如実にあらわれている。

イリイチは、こう警鐘を鳴らしている。

> 人々の面倒をみる技術官僚があらゆる次元での成長への限界設定を委任され、その諸限界を、これ以上の成長が完全な崩壊を意味する臨界点ぎりぎりに設定することだって考えられる。こういう悪の楽園はたえうる限度での産出の最高水準に、産業主義時代を維持することもできるのである。そうなれば人間は、自分を保護して生きのびさせ、しかも生きのびることをますます無価値にするような、プラスティックのドームの中で生きることになるだろう。（p.220）

国民の「命を守ること」を第一義にする政治家、行政官僚、専門家などによって、臨界点まで高められた高度な免震建築や高さ十数メートル、長さ数十キロメートルに及ぶ津波防潮堤、さらには、精緻な防災計画、国民保護計画、GIS上の統合型災害情報システムといった数々のプラスティックのドームという名の悪の楽園（「物象化」していく道具たちに支配される世界）で、人びとは、危うい「安全・安心」を保証される。ここには、道具をめぐる物象化がもたらす甘く危険な相互依存の関係 ―〈人間・対・自然〉および〈個人・対・社会〉関係 ― が成立している。

(3) 「自立共生」

最後に、第3のポイント、本書全体の看板フレーズとも言える「自立共生」（コンヴィヴィアリティ）について述べる。イリイチは、自立共生的な道具と操作的な道具とを区別する。自立共生的な道具とは、

> それを用いる各人に、おのれの想像力の結果として環境をゆたかなものにする最大の機会を与える道具（p.59）

であり、操作的な道具とは、

> それを用いる人々に対してこういう可能性を拒み（p.59）

> その性質からして、それを自律的に使用する自由をごく少数の者に制限してしまうような道具（p.103）

である。

この区別あるいは差異化がなぜ生じるのか。その発生的機序は、まさに、当該の道具をめぐる〈媒介〉関係の物象化だと言わざるを得ない。人間と自然の関係、および、人間と人間の関係が「主」となり、道具がそれに対する「従」の位置にある限り、物象化は抑制され、道具は自立共生的な状態を維持できる。逆に、道具が「主」の位置を占め、道具自体の効率性や有効性が一人歩きを始めれば、関係性は「従」へと後退し、道具は操作的な道具へと堕落していく。

よって、当然のことながら、

> 原則として、自立共生的な道具と操作的な道具の区別は、その道具の技術的なレベルとは無関係である。（p62）

言わゆるハイテクな道具にも自立共生的な道具と操作的な道具とがありうるし、ローテクな道具についても同様である。

２．バタイユに照らしたイリイチ

見田宗介が、「バタイユとは対極的な資質をもつ思想家であるイヴァン・イリイチ」（見田, 1996, p.167）と対照させているように、イリイチの問題設定は、バタイユ（1998; 2003; 2018）のそれと対比すると理解しやすい。

真木（2014）によれば、〈自然・内・存在〉かつ〈社会・内・存在〉としての人間のありよう、つまり、〈内・存在〉にある人間は、自然および他者との融合的な統一体である〈本源的な共同体〉において、〈無媒介〉に関係しあっている。そこには、科学、インフラといった自然との〈媒介〉も、市場、制度といった他者との〈媒介〉も存在しない。見田（1996）が「あらゆる効用と有用性の彼方にある自由の領域」と定義する「至高性」、また、バタイユ自身が「私の言う内的体験とは、通常、神秘的体験と呼ばれているもの、すなわち、恍惚の、法悦の、少なくとも瞑想がもたらす感動の状態を意味するものである」（バタイユ,1998, p.21）と定義する「内的体験」などの鍵概念で特徴づけられるバタイユの議論は、基本的に、この原初的で〈無媒介〉な状態を理想郷として志向しているように思われる。

このバタイユを鏡にしたとき、共に近代産業社会の影の部分を厳しく批判するとは言え、イリイチが、より中庸・中道的な立場をとっていることは明白である。道具の〈媒介〉性が物象化するなかで、〈人間・対・自然〉かつ〈個人・対・社会〉の構造が生みだす近代産業社会の自己増殖力に対して、すなわち、科学主義、官僚主義、資本主義を貫徹させようとする強大な推進力・慣性力に対して、バタイユは、近代社会産業の屋台骨を支える〈媒介〉群と無限遠の距離を置き、徹底的にそれらと不関与であることを通して、それらを根底から破壊して、〈内・存在〉という原初的状態へと原点回帰させようとする。それとは対照的に、イリイチは、本書のタイトルに「道具」が含まれていることが端的に示している通り、〈媒介〉を完全に手放すわけではない。あくまで「道具」ありきで、〈対・存在〉の枠内で、〈媒介〉をめぐる物象化を抑止すべく ― 自立共生的な道具の復興を目指して ― 軌道修正を試みる戦略をとろうとする。

イリイチによれば、操作的な道具と化した〈媒介〉によって、人間は自然に対して、また社会に対して、隔離されつつも依存してしまう。たとえば、防潮堤という〈媒介〉によって、人びとは海と隔離されつつ、それによって安全を保証され、またそれを前提とした生活や生業を営むことを強制されるという意味で、海に依存してもいる。あるいは、市場経済という〈媒介〉によって、人びとは具体的な他者と隔離されつつ、それを通した生産活動や消費生活を営むほかないという意味で、他者に依存してもいる。

このような隔離されつつ依存するという関係性に代わる新しい関係性を実現するための新しい道具を、自立共生的な道具として導入しようとするのがイリイチの眼目である。〈媒介〉の完全撤廃ではなく、道具をめぐる関係性の「物象化」を抑制し、操作的な道具を自立共生的な道具へと一つずつ丁寧に置き換えていくという漸次的なベターメントが念頭に置かれている。

この戦略を象徴するキーワードが「逆倒」である。近代産業社会の中で、各種の〈媒介〉が操作的な道具へと転落していくムーブメントにブレーキをかけ、さらに、その強力な流れを「逆倒」し、自立共生的な道具によって〈媒介〉された関係を、人間と自然の間にも、人間と人間の間にもステップ・バイ・ステップで回復するという路線である。

以上に述べたイリイチとバタイユのコントラストは、イリイチの「歓びに充ち節制と解放する禁欲」（見田, 1996, p.168）に対して、バタイユの「侵犯に充ちた自己解放と徹底した消尽」を対置することで集約的に表現できるかもしれない。この対比は、もちろん、時間、特に現在という時間に対する志向性の対比でもある。イリイチにおいて中心を占めているのは、現在のインストゥルメンタルな価値である。この場合、現在は、未来に対して「媒介・手段的」な価値をもつ。他方、バタイユにおいて志向されているのは、現在がもつコンサマトリーな価値である。この場合は、現在は、未来を参照することなく、それ自体として「直接・享受的」な価値をもつ（矢守, 2018）。バタイユの主著の一つ（バタイユ, 2003）が、「『役に立たない』ことの積極的な意義を深く考えさせてくれる」（西村, 2019）と評されるとき、未来に設定された何らかの目標に対して、現在がインストゥルメンタルな意味で「役に立たない」ことの意義が強調されている。

３．３つの課題

本書『コンヴィヴィアリティのための道具』に提示されたイリイチの問題意識は十分クリアで説得的で、筆者ごときが批判的コメントをつける立場にはむろんない。それでも、生産的な読解に向けて、筆者なりの問題提起をしておきたい。全部で3点あり、コンセプト（概念）、ロジック（論理）、プラクティス（実践）にそれぞれ関連する論点である。

第1は、基幹コンセプト「コンヴィヴィアリティ」（自立共生）の多義性とゆらぎである。イリイチは、この基幹概念について、こう述べている。1節と同じ箇所になるが、もう一度引いてみる。

> 私はその言葉に、①各人のあいだの自立的で創造的な交わりと、②各人の環境との同様の交わりを意味させて、またこの言葉に、③他人と人工的環境によって強いられた需要への各人の条件反射づけられた反応とは対照的な意味をもたせようと思う。（pp.39-40）[①～③は、引用者が挿入]

この整理は平明ではあるが羅列的で、本稿で依拠してきた真木（2014）が構築した体系の方がはるかにロジカルで分解能が高いと思われる。すなわち、①は、「対・社会存在」と化した人間に「社会・内・存在」の要素を回復すること、②は、「対・自然存在」と化した人間に「自然・内・存在」の要素を回復すること、そして、③は、「対・社会存在」および「対・自然存在」の硬直化を生む元凶となっている〈媒介〉をめぐる「物象化」を「逆倒」することにそれぞれ該当しているように思われる。コンヴィヴィアリティ（自立共生）とはどういうことなのかについて、「各人の…交わり」、「環境との交わり」、「条件反射づけられた反応とは対照的な意味」など、断片的で相互の論理的関係性がいささか不明瞭な定義しか提示していないイリイチよりも、真木の定式化の方が論理的な一貫性と包括性が高い。この点はイリイチの弱点だろう。

第2は、基幹ロジックの不徹底である。イリイチによるコンヴィヴィアルな社会の提案のベースにある近代産業社会批判の基幹ロジックは、前掲の「手段を目的に等値する破壊的な作用」、「目的と化するに至った手段」といった言明を参照しても、明らかに「物象化論」にあると思われる。ところが、ときとして「疎外～収奪論」に依拠していると見なさざるを得ない記述も登場する。たとえば、

> 現代の科学技術が管理する人びとにではなく、政治的に相互に結びついた個人に仕えるような社会、それを私は“自立共生的（コンヴィヴィアル）”と呼びたい。（pp.17-18）

や、先に1節で、操作的な道具の定義に関して引用した箇所を参照する限り、「道具を手中におさめている人（道具を収奪した人）vs.道具から疎外された人」という「疎外～収奪」論の構図が見え隠れしている。

「疎外～収奪」関係においては、「疎外されている者の対極に収奪者がいる。しかし、物象化の現象においては、どこにも、可視的な収奪者は見いだせない」（大澤, 2014, p.246）。だから、疎外と収奪に依拠した課題よりも物象化がもたらす社会的課題の方が、通例、より狡猾で根が深い。前者には誰の目にも明らかな悪者がいるが、後者ではそうではないからだ。一見したところ、みなが満足し八方丸くおさまったまま ― 政府はあたたかく保護し、国民はありがたく保護される ― 、事態が悪化していくところに物象化の罠の深さがある。この点の見極めの不徹底は、いかに問題を解決するかという実践論にも影を落とすことになる。

第3の課題は、問題解決のための現実的なプラクティスへ向けた指針が不十分という点である。つまり、「逆倒」のために私たちは具体的に何をすればよいのか。この点に関する指針は本書には十分には示されていない。

> 第1に、いっそう多くの人びとがわれわれの今日の危機の性質について啓発され、諸限界は必要だし自立共生的な生活スタイルは望ましいということを理解するようになるための具体的な手順をはっきりさせること、第2に、人びとの質素に暮らす権利を要求し、人びとを自立共生的な生活に満足するように…（中略）…。第3に、あるひとつの社会内で受け入れられる政治的ないし法的道具を再発見、再評価するとともに、その芽生えがあるところではどこでも自立共生的な生活をうちたて擁護するために…（後略）。（p.221-222）

これらの示唆は、具体的なプラクティスを導くには、もちろんまだ抽象的に過ぎる。

しかし、大雑把な方向性は提示されているわけだし、そもそも、近代産業社会の閉塞と課題を根源的な水準にまで踏み込んで鋭く指摘し、「自立共生的」な道具の復権という形でそこからの脱出路を描いて

みせた手腕をもって、本書は十分高く評価されるべきだろう。さらに加えて、個別具体の社会的課題に関する実践的なガイドまで本書に求めるのは筋違いの要求だとも言える。そうした作業は、個々の具体的なフィールド、社会的課題に即してなされるしかないからだ。

そこで、本小文でも、「災害と共生」の領域にフォーカスを絞った上で、イリイチが提示した方向性について若干の補足だけを、節をあらためて、追記しておこう。具体的には、イリイチが提起したもう一組の鍵概念、つまり、「第1の分水嶺」と「第2の分水嶺」を参照しながら、「災害と共生」の領域で「逆倒」を試みる実践に見通しをつけておくことにしたい。

４．第2の分水嶺を超えた地点でなすべきこと

イリイチの「2つの分水嶺」が意味するところは簡明で理解しやすい。「第1の分水嶺」とは、前近代産業社会の負の側面と近代産業社会の正の側面との戦いのバランスシートが、後者優位へと転じる境界線のことで、これは、近代産業社会へ向けたテイクオフということである。別の言葉で表現すれば、近代産業社会の〈媒介〉（道具群）が、「内・存在」が有していた幸福・不幸の両義性を克服し、幸福の方だけを（控えめに言っても、圧倒的に幸福の方を多く）抽出できるようになった（と見かけ上見える）状態のことである。イリイチが、

> 二十世紀の初頭に医療行為が、その結果を科学的に確認する時代に突入したことを理解するために、1913年と55年を分水嶺となったふたつの年として…（中略）…滅菌された水は下痢による幼児の死亡率をひきさげ、アスピリンはリウマチの苦痛を和らげ…（中略）…近代的医療が個人の健康に積極的に貢献したのは、ほとんど疑いのないところだ（pp.30-31）

と述べるとき、社会が、医療の分野で、第1の分水嶺を越えたことが示されている。

しかし、〈媒介〉（道具群）は、やがて、その限界効用を低下させはじめ、さらに進んで、自己目的化と物象化という谷底へと転がり落ち始める。〈媒介〉がもたらした近代産業社会の正の側面と、それ自体が物象化することによって自ら生み出す負の側面、この両者のバランスシートにおいて、後者がついに優勢になる境界線、これこそが第2の分水嶺である。別の言葉で表現すれば、近代産業社会の〈媒介〉（道具群）がもたらした「対・存在」の栄光が爛熟し尽くし、その影の側面があきらかになった ― 上述した「見かけ」がまさに表面的な見かけに過ぎなかったことが大半の人の目に明瞭になった ― 状態である。イリイチが、

> 医療業務は大病院のスタッフの手に集中されるようになった。奇蹟的な治療への信仰が治療と健康管理における良識と伝統的な智恵を抹殺したのである。薬剤の無責任な使用が医者から一般大衆へ拡がった。専門化をいっそう推進することの限界効用が低下した…（p.31）

と述べるとき、社会が、医療の分野で、第2の分水嶺を越えたことが宣言されている。

以上の展開を「災害と共生」の領域に移し替えるための作業を、筆者は、「災害1.0／災害2.0」という一対の概念を基礎にした考察（矢守, 2017）を提示することで、実はすでに完了している。ここで最低限の復習だけをしておくと、次の通りである。

一方に、「対・存在」の社会への転回が不十分であることが主因となって、すなわち、〈媒介〉が存在しない（または、足りない）ことによって生じるタイプの災害が存在する。たとえば、防潮堤や河川堤防が存在しないこと、あるいは、災害情報や警報システムが存在しないことがもたらす災害、それが「災害1.0」である。しかし他方に、「対・存在」の社会への転回が過剰であることが主因となって、すなわち、〈媒介〉が存在する（または、多すぎる）ことによって生じるタイプの災害が存在する。たとえば、防潮堤や河川堤防が存在するからこそ津波や水害リスクの大きな地域に多数の人が居住することがもたらす災害、「無用の社会的混乱を招くおそれがあったので」という理由でリスク情報が公開されなかったことがもたらす災害など、こうしたタイプの災害が「災害2.0」である。ここで、第1の分水嶺は、「災害1.0」が〈媒介〉によって ― 見かけ上 ― 封じ込まれる時点に対応する。また、第2の分水嶺は、「災害1.0」が克服された後、そこに重層する形で新たに登場した「災害2.0」の悪影響が無視できない水準に達した時点に対応する。

この「災害1.0／災害2.0」について、筆者は、前者が後者によって完全に置き換えられるのではなくて、両者が重層して「共時的」に併存している点が重要だと指摘した（矢守, 2017）。これは、イリイチが、

バタイユのように、「道具」そのものを完全に手放す方向ではなく、中道・中庸路線、すなわち、道具をめぐる物象化を抑止することで、そのコンヴィヴィアリティを復活させようとする路線と一致する。第2の分水嶺は、第1の分水嶺を社会が越えたことがもたらす「光と闇」の双方を伴って生じているのだから、道具を完全放棄して、第1の分水嶺以前の社会に戻ることは、仮に、近代産業社会を支えた道具の「闇」を制圧したとしても、同時に「光」までも喪失してしまうことにつながる。

「光と闇」は一対のものである。その意味で、「災害1.0／2.0」については、これら2つのタイプの災害を二方面作戦で同時並行的にマネジメントするほかない。イリイチ流に言えば、道具の完全放棄という過激で急進的な策に訴えるのではなく、道具のコンヴィヴィアリティを一つ一つ丁寧に回復するという穏当で漸進的な策を練らなければならない。こうした中道・中庸路線は、いずれかの極 ― 〈媒介〉の増強を進めて防災・減災、復旧・復興の近代化をさらに推し進めようとする極、および、それとは対照的に、〈媒介〉を徹底して廃絶し「本源的な共同体」という理想郷へ回帰しようとする極 ― を舌鋒鋭く説く論陣と比較すると、中途半端で歯切れが悪いという印象をもたらすことがある。

しかし、実際には、極論の方こそ一本調子の紋切り型で、理論的深度にも実践的練度にも劣る場合が多い。道具すなわち〈媒介〉がもたらす「光と闇」を丁寧かつ根気よく均衡させようとする節度ある姿勢、これこそが本書の魅力である。

最後に、本書（原書）の出版年が1973年であること、また、最初の邦訳書（訳書名は『自由の奪回：現代社会における「のびやかさ」を求めて』（岩内亮一訳））が1979年に出版されていることを付言しておく。ローマクラブが「成長の限界」を発表したのが1972年、その翌年に出版された本書もまた、際限なく「成長」するかに見えた近代産業社会の陥穽を冷静に見きわめ、かつ、それを踏まえた上で、希望を見いだすべき方向性を示唆する。その後、1989年、本稿で参照した文庫版の元になる訳書が、日本エディタースクール出版部から出版され、2015年に文庫版が出版された。原書の出版から早や半世紀が経過した今も色褪せない議論は、本書が、近代産業社会について、移ろいゆく表層のトレンドではなく、その最基底部に巣くう病巣を的確に突いていたことを物語っている。

参考文献

バタイユ, G.（1998）内的体験（出口裕弘訳）　平凡社ライブラリー

バタイユ, G.（2003）呪われた部分／有用性の限界（中山元訳）　ちくま学芸文庫

バタイユ, G.（2018）エロティシズム（酒井健訳）　ちくま学芸文庫

真木悠介（2014）現代社会の存立構造　真木悠介・大澤真幸「現代社会の存立構造／『現代社会の存立構造』を読む」　朝日出版社　pp.17-200

見田宗介（1996）現代社会の理論 ― 情報化・消費化社会の現在と未来 ―　岩波新書

西村明（2019）東大教師が新入生にすすめる本　UP, 558, p.19.

大澤真幸（2014）『現代社会の存立構造』を読む　真木悠介・大澤真幸「現代社会の存立構造／『現代社会の存立構造』を読む」　朝日出版社　pp.201-341

矢守克也（2017）災害と共生 ― 人間・自然・社会 ―　災害と共生, 1, pp.15-20.

矢守克也（2018）アクションリサーチの〈時間〉　矢守克也「アクションリサーチ・イン・アクション ― 共同当事者・時間・データ ―」新曜社　pp.75-96